「美濃中学校校歌」

作詞　横山盛作

作曲　鵜飼幹夫

1　古城山　こごしきほとり
梅山に　つどうともがき
いつくしみ　むつみあいつつ
みがかばや　全きいのち

2　長良川　清き流れを
若鮎の　つれのぼるごと
次の世を　にのう若者
つとめばや　のぞみを胸に

3　美しき　小倉の山の
とこしえの　緑を窓に
すこやかに　強く正しく
ことごとの　誠きわめん

＜永久保存版＞
美濃市立美濃中学校
校歌解説

美濃中学校校歌

作詞　横山盛作
作曲　鵜飼幹夫

（一）

古城山　こごしきほとり
梅山に　つどうともがき
いつくしみ　むつみあいつつ
みがかばや　まつたきいのち

険しい古城山の山裾（やますそ）に広がる
梅山の学び舎（や）に集まる仲間たち（よ）
お互いに分け隔てなく仲よくし合いながら
若く健全な魂を磨きたいものだ（研鑽し合い若者らしく命を輝かせたいものだ）

（二）

長良川　清き流れを
若鮎の　つれのぼるごと
次の世を　にのう若者（わこうど）
つとめばや　のぞみを胸に

長良川の透き通ったきれいな流れよ
若鮎が列をなして元気に川上へと上っていくように
次の世代を担う若者として
勉学に励みたいものだ　望みを抱いて

（三）

美しき　小倉の山の
とこしえの　緑を窓に
すこやかに　強く正しく
ことごとの　誠きわめん

美しい小倉の山が
変わらぬ緑を装っているように
心身健やかに強く正しく（変わらぬ志をもって）
全てのことに対して真心をもって真実を突き詰めていこう

【解説（語釈）】

○美濃中学校は、昭和二十二年四月に、岐阜県武儀郡美濃町立美濃中学校として設立された。同年五月に開校式が行われたが、開校当時は美濃小学校六教室と武儀中学校（現，武義高等学校）の四教室を借用しての出発であった。翌二十三年七月、**梅山**（現在の美濃小学校プールのある辺り）に北舎八教室・宿直室・小使い室・便所2棟が完成、更に二十四年三月には南舎十一教室が完成して、生徒と職員室の移転を果たし、まとまった授業が開始された。

○二十五年の四月には校旗、五月には校歌が制定された。校歌の作詞者は横山盛作氏、作曲は鵜飼幹夫氏である。鵜飼幹夫先生は、平成二年度の春のPTA総会に美濃中に来校され、壇上で指揮を振られ、教職員とPTA会員全体で起立して校歌を歌いあげた。（その年の秋に鵜飼先生は帰幽された。）

○歌詞に「古城山、こごしきほとり　梅山につどう友がき」とあるのは、美濃中学校の設立された当時の地が梅山だったからである。現在の東上野の地に移ったのは昭和三十三年のことである。七月に北舎が完成し、翌三十四年七月に北舎とともに特別教室三つ、南舎特別教室三つが完成し、九月よりこの新校舎で全校生徒の授業が再開された。美濃中はかつて第一中学校と呼んでいた時期があり、そのため女子の制服には白線一本が入っている。美濃北中は第二中、昭和中は第三中という意味で、それぞれ女子の制服は二本線、三本線となっているが、北中は統合したため、現在は昭和中女子の制服に三本の白線が残っている。

○「古城山」とは、戦国時代に上有知含めた武儀郡一帯を納めていた佐藤氏の「鉈尾山」城に因んで呼ばれる名であり、正式には「鉈尾山（なたおやま）」といった。初代鉈尾山城主は佐藤清信。その子の秀方、さらに秀方の子方政（正式名称は佐藤才次郎方政。母は金森長近の姉）と、佐藤氏は戦国、安土桃山から江戸初期にかけて三代に渡って城主を務めた。方政は関ヶ原の合戦の時に、石田三成（豊臣方）に付き、加納の戦で敗れた。（叔父の金森長近に西軍に付くか、東軍に付くか書状を通じて相談をしている。長近は東軍に付くようにアドバイスをしたが、これまでの豊臣の恩義に報いるため西軍に付く。）鉈尾山となぜ言ったかというと、現在でも古城山に登ると頂上には本丸跡が残っているが、そこには四方を壁で囲んだ塀があった。その塀には仕掛けがしてあり、本丸のある一ヵ所の綱を鉈でパチンと切ると四方の壁が崩れ落ちるようになっていた。攻め寄せた敵兵は全滅するという仕掛けがあったからである。佐藤氏は源氏の流れをくむ武将であり、源氏は古来藤原氏の立役者的な存在で関係が深い。そのため、鉈尾山城は「**藤**城（ふじしろ）」の別名もある。そして、この名に因むのが江戸時代末期の郷土の偉人であり漢学者、村瀬藤城である。藤城はこの山を秀麗な山として崇め、また、秀麗な山のある所にこそ秀霊が集まるとして、梅山の地に「梅花村舎」を建て学問を開いた。「梅花村舎」の周りには梅の木が三千本植えられていたという。藤城は頼山陽の高弟として知られ、塾では四書五経をはじめとする経学詩文などを講じた。美濃の教育の原点はこの地にあるとも言える。「梅花」は漢詩にもよく詠まれ、厳冬の中にも先駆けて花を開き、芳しい香りを漂わせる春花である。その姿が藤城の理想とする学風の琴線に触れたのであろう。

○こごしき

古語「こごし」（形容詞・シク活用）の連体形。意味は、「岩が重なりごつごつしていて険しい」の意。万葉集「岩が根のこごしき山を越えかねて」（訳：岩山の険しい道が越えられなくて）

○いつくしみ

古語「いつく（斎く）」（大切に世話をする）の派生語で、現代語は「いつくしむ」（動詞・五段活用）。意味は、「かわいがって大事にする」。漢字では「慈」をあてる。「慈」は「友」を表すサンスクリット語に由来すると言われ、「友情、親愛の思い」を表し、「利益と安らぎを与える」の意味を含む。

○むつみあいつつ

「むつみあう」は古語「睦ぶ」（上二段動詞）の連用形に「合う」が付き、一語的（複合語）になったもの。古語では「むつびあう」。この語は雅語で、詩歌の中でしか使われない言葉。意味は「分け隔てなく仲よくし合う」。現代語としては、「むつまじい」（形容詞）という形で使われる。本来の表記からすると「むつびあいつつ」と「み」ではなく「び」とするところ。「つつ」は接続助詞で、いろいろな意味を添えながら二つの事柄をつなぐ働きをする。基本の意味は、二つの動作が同時に行われることを示し、「～しながら」の意味でつなげる。「むつみあい」と「みがかばや」を「つつ」でつないでいるが、重点は「みがかばや」にある。

○みがかばや

「みがく」四段動詞の未然形に、終助詞「ばや」（希望の意）がついたもの。「みがく」には、ざっと、次のような意味がある。「表面をこすってつやを出す。作り飾る。美しく装う。いよいよ輝かせる。光を増す。努力する。」。漢字表記では、「磨く・研く」を当てる。「研磨（する）」という言葉があるように、どちらの漢字も同じ意。

「みがかばや　まつたきいのち」は、倒置表現で、「みがかばや」を強調。「みがく」の対象が「まつたきいのち」、「いのち」（＝魂）を磨く、光り輝かせるの意味。

○まつたきいのち

古語「まつたし」（形容詞・ク活用）の連体形「まつたき」が「いのち（命）」に係ったもの。現代語は「全い（まつたい）」（形容詞）の語形。派生語として、「全く」（副詞）や「全うする」（サ変動詞）がある。「まつたし」は、「①欠けたところがない。完全だ。②安全である。無事である。」の意味がある。ここは①の意で、「欠けたところのない完全ないのち」。

古代歌謡に

「命（いのち）の　全（また）けむ人は　畳薦（たたみこも）　平群（へぐり）の山の熊白檮（くまかし）が葉を　髻華（うず）に挿（さ）せ　その子」

という歌があるが、「命の　全けむ人」とは、「若い健康な人」という意味である。これは「老人や病人は生命力が不完全だ（年を取ると生命力は削られていくという考え）という古代の人々の考え方を反映した表現。

「まつたき　いのち」の表現にも、「若く健全な（人の）いのち」という意味が込められており、それが「みがかばや」の対象になっているので、全体としては「若者らしく健全な命をみがき輝かせたい」といった意味合いになる。ここの「いのち」とは、その根源の「魂」ととらえると分かりやすい。和歌では、「たまきはる」〈命〉と、「命」に係る枕詞もある。

○長良川

鵜飼いの行われる歴史と伝統のある川として、全国に知られている。郡上市の大日岳を源流として、幹川流路の延長は一六六キロメートルに及ぶ。濃尾平野を潤す川であり、この河川の流域は沃土で良い土地柄とされてきた。「長く良く潤す川」から「長良川」と言われる。史上、「長良」の文字が出てくるのは織田信長の時代の古文書。上有知（美濃町の旧名）は風光明媚で和紙づくりに適した環境にある。そのため和紙作りは古くから盛んで、また、物資の輸送にも長良川の水運を利用して発展してきた。長良川はアユをはじめ、数々の水中生物が生息する豊かな河川としても知られている。特に長良川のアユは美味で、岐阜には宮内庁のご漁場もある。美濃では曽代用水の取り入れ口付近で漁をし、とれたアユを献上していた。「アユ」は万葉集（奈良時代）にも出てくるが、「年魚」と書かれている。アユは「一年」ものの魚で、それに因んだ表記。

校歌では、「若鮎」と「若人」が類比され、「若鮎」が列をなして群れ、激しい流れの中でも元気に遡上していくように、次の世代を担う「若者」として、世の激しい移り変わりの中においても「志（望み）」をもって勉学に励もうと、激励している。

○清き流れを

「清し」（形容詞・ク活用）の連体形が「流れ」（名詞）に付いたもの。「清し」は、「けがれがなくきれいだ。清浄だ。さわやかだ。」が基本の意味。「流れ」は「水流。流水。」の意から、「酒のしずく」「血統」「定めのない境遇」と、幅広い意味をもつ語。ここは長良川の「清流」を指している。「を」は体言（名詞）に付いた終助詞で感動（「～よ」）の意味を添える。

○にのう

古語「になふ」（四段動詞）。現代語は「になう」（五段動詞）で、「責任をもって引き受ける」の意。音声言語としては「にのう」と発音するが、表記は古語なら「になふ」、現代語なら「になう」と書くのが正しい。「になう（nau）」の部分は「a」「u」と母音が重なるため、「au」→「o」となって長音化する。「にのう（no）」（ニノー）となる。

○つとめばや

古語「つとむ」（下二段動詞）の未然形に終助詞「ばや」（希望：～したいものだ）が付いたもの、前出の「みがかばや」と同じ形。「つとむ」は、「精を出して行う。一生懸命する。はりきる。」という意味。現代語は「つとめる」の語形で、「精を出して励む」の意味で使う場合は、「努」の漢字を当てる。

○小倉山

江戸時代に金森長近が京都の小倉山（『小倉百人一首』の編者で高名な藤原定家の山荘があった場所）に因んで、それまで「尾崎丸山」と称していたのを改名し、小倉山城を築いた。慶長十年（一六〇五年）に高山城主であった長近は、養子の可重（ありしげ）に高山城を譲り、隠居した。小倉山城は長近の隠居城であり、別名、小倉居館とも言った。現在は石垣と土塁が残っているだけだが、往時は山腹部分に本丸と二の丸、山麓に三の丸があったと言われている。長近の後は、実子の長光が上有知藩主（可重より二万石を分知され美濃国上有知藩が成立）として治めていたが、嗣子無く没したため、改易、廃藩となり、小倉山城は廃城となる。元和元年（一六一五年）に上知有は尾張藩の所領となり、天明二年（一七八二年）には、尾張藩上有知代官所が城跡に置かれた。

現在は、小倉公園として春の桜、秋の紅葉で有名であるが、開園は明治二十七年（一八九四年）のことで、御料林（明治期の皇室財産林）になっていた。明治三十三年（一九〇〇年）美濃町に払い下げられ、明治四十五年（一九一二年）には、造園・作庭家として高名な長岡安平の設計指導による大改修が行われて完成した。市民憩いの場所である。小倉山の標高は一九五，二メートル。

○とこしえの緑

「とこしえ」（名詞）・（漢字表記は「長（とこ）しえ」、もしくは「永久（とこしえ）」。）は、現代語では名詞として使われ、「とこしえの〇〇」「とこしえに〇〇」という使い方をする。意味は、「いつまでも変わらないこと。ながく続くこと。」。「常夏（とこなつ）」（「いつも夏」の意）という言葉はよく聞かれる。古語に「常（とこ）しへなり」（形容動詞・ナリ活用）の語がある。一校歌の歌詞は擬古文的な言い回しがされているので、本来ならば「とこしへ」と表記すべきで、現代仮名遣いで書くと、現代語と認識されてしまう。古語「とこし」（形容詞）に「なへ」が付いて形容動詞「とこしなへ」ができ、さらに「な」の音が脱落して「とこしへ」（形容動詞）となったもので、この語形が現代語でも使われるようになった。前述で少し触れたが、「常しへ」の「常（とこ）」とは、「いつまでも変わらない、永遠である」の意味。

「とこしえの緑」は小倉山の樹木、自然の様子を形容した表現で「いつまでも変わらぬ緑」ということだが、これは小倉山が「自然豊かな山である」ことをさしている。

美濃小校歌の三番では「**緑、色濃い小倉の山**に連なる学び舎、理想をも高く」と詠われている。

○窓に

「とこしえの　緑を窓に」で一旦、切れている。「窓」の語には「内側と外側の境」「出入り口」（扉とは違うが）という意味合いがある。「心の窓を開ける」と言えば、心の内を外に出す、現すといった意味を込めた比喩表現になる。また、「家の窓」といった場合、ある意味においてはその家の「顔」（外的特徴）といったニュアンスがあろう。この歌詞の意味としては、「変わらぬ緑を装っている」「変わらぬ緑の姿である」と考えるのがよいと思う。三番の歌詞の前半は「小倉山がいつも変わらぬ緑を装っている」ことを詠っているが、これが後半の「すこやかに　強く正しく　ことごとの　誠きわめん」とどういう意味合いでつながるのかを考えないと三番に込められた歌詞の意味がぼやける。三番の歌詞は「ことごとの　誠きわめん」に重点があるが、《「すこやかに　強く正しく》が「きわめん」を形容していることを合わせると、小倉山がいつも緑で豊かな自然を装っているように、「（我々も）すこやかに（いつも元気で）　強く　正しく」「（変わらぬ志をもって）ことごとの　誠きわめん」と繋げ、前半は後半を引き出すための比喩と取るのがよいだろう。

○すこやかに

「すこやか」（形容動詞）は、古語「すくよか」（形容動詞・ナリ）の語形変化「く(ku)」の「u」→「o」の母音交替「こ（ko）」となったもの。意味は、肉体的に体ががっしりしていること。健康。丈夫。また、精神的にも心がしっかりしていること、元気などの意味がある。要するに、「心身共に元気で丈夫であるさま」、である。

○ことごと

漢字表記すれば「事事」で、「多くのこと、全てのこと」という意味。

○まこと

「まこと」とは「ま（真）・こと（言・事）」の意で、「偽りでないこと。本当。真実。」

○きわめん

ここも本来ならば、「きはめむ」と表記するところ。現代語には「きわめる」（下一段動詞）があるが、この現代語に「ん」がつくことはない。現代語で表すなら「きわめよう」となる。古語には「きはむ」（下二段動詞）があり、その未然形「きはめ」に、推量の状動詞「む」がついた形で、「きはめむ」となったもの。「きはむ」とは、「極点（最高点）に行かせる。押し詰める」が基本の意味。漢字表記には「極・究・窮」の字を当てる。「む（ん）」は推量の助動詞でここは「意志（～しよう）」の意味。なお「む」は母音の「u」がとれて鼻音「m」→「n」と変化して「ん」となっていく。口をつむんで鼻から息を出すように発音するために母音が落ちやすく、「mu」の「u」の落ち、「m」が「n」に変わる。「m」「n」も同じ鼻音の子音であるため、このような変化が起こる。

「きわめん」は、「深く探って本質をつかもう、もっとも深いところまで学んで知ろう、つきとめよう」という意味で、「誠」を「きはむ」なので、「ものごとの真実を突き詰めていこう」ということになる。

校歌は一から三まで四行書きで、五七調（五音・七音の語句）でまとめられている。四行書きにされているのは、漢詩の絶句形式（起承転結の構成）を意識したところがあるからだろう。（校歌には絶句のような明確な構成は認めにくいように思うが、見方によっては一行目で自然景を提示して、二行目でそれを受けて広げ、三行目で転じて四行目で全体がまとめられている、と取れなくもない。）

詩歌の歴史では、「万葉集」には五七調の歌が多く、歌風は男性的（これを「ますらをぶり」という）、素朴、実直な調べの歌集として知られている。「万葉集」は日本で最初に編纂された和歌集で、後世の和歌に与えた影響は大きい。

美濃中の校歌は、詩歌の伝統を踏まえ、歌詞に使われている言葉には配慮があり、全体がきびきびと力強く荘重な調べとなっている。美濃の美しく豊かな自然（古城山、梅山、長良川、小倉山）や伝統を描写し、そういう環境の中で、学び舎で学ぶ若者が将来への志をもって仲睦まじく、お互い切磋琢磨しながら勉学に励み、全霊をこめてものごとにあたり、お互いの命を輝かせようではないか、と温かく励ます内容となっている。

令和二年　五月　二十九日

文責　島田　敬博